公開フォーラム
古代文明の生成過程
ーエジプトとアンデスー

関雄二（国立民族学博物館）

2015 年 1 月 25 日（日）、ＪＰタワー＆カンファレンス　ホール 1（東京）にて、公開フォーラム『古代文明の生成過程ーエジプトとアンデス』を開催した。古代アメリカ学会の協力のもと、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）が主催した企画である。東京駅前という好立地もあり、181 人の参加を得て、会場はほぼ満員となった。

本フォーラムは、報告者が現在進める研究テーマである権力形成、とくにその経済的側面に焦点を絞り、世界の古代文明間の比較を行うという趣旨の下で開かれた。一昨年のマヤ文明、昨年の西アジア文明に続き、今回はエジプト文明を対象とした。はじめに報告者より開催の趣旨が述べられ、次に近畿大学の高宮いずみ氏と早稲田大学の河合望氏によるエジプトの発表があり、これを受けて報告者と埼玉大学の井口欣也氏によるアンデスの発表が続いた。最後に報告者の司会の下、パネリストによる討論が行われた。

高宮いずみ氏は「経済から見た古代エジプト初期国家の形成」のタイトルで、巨大なピラミッドが築かれた古王国時代以前の先王朝時代と初期王朝時代の社会を扱った。先王朝時代については、西アジアからの伝播と思われる農業・牧畜を主体とする自給自足的経済からの発展過程を紹介し、ものづくり、交易、埋葬の様相を語った。また初期王朝時代を、統一国家が出現し広域の再分配経済が始動した時期ととらえ、宮廷と官僚組織、文字の使用、徴税システム、王領地、工芸品生産、交易と採掘、埋葬などの観点から複雑社会が出現した時代であったことを示した。

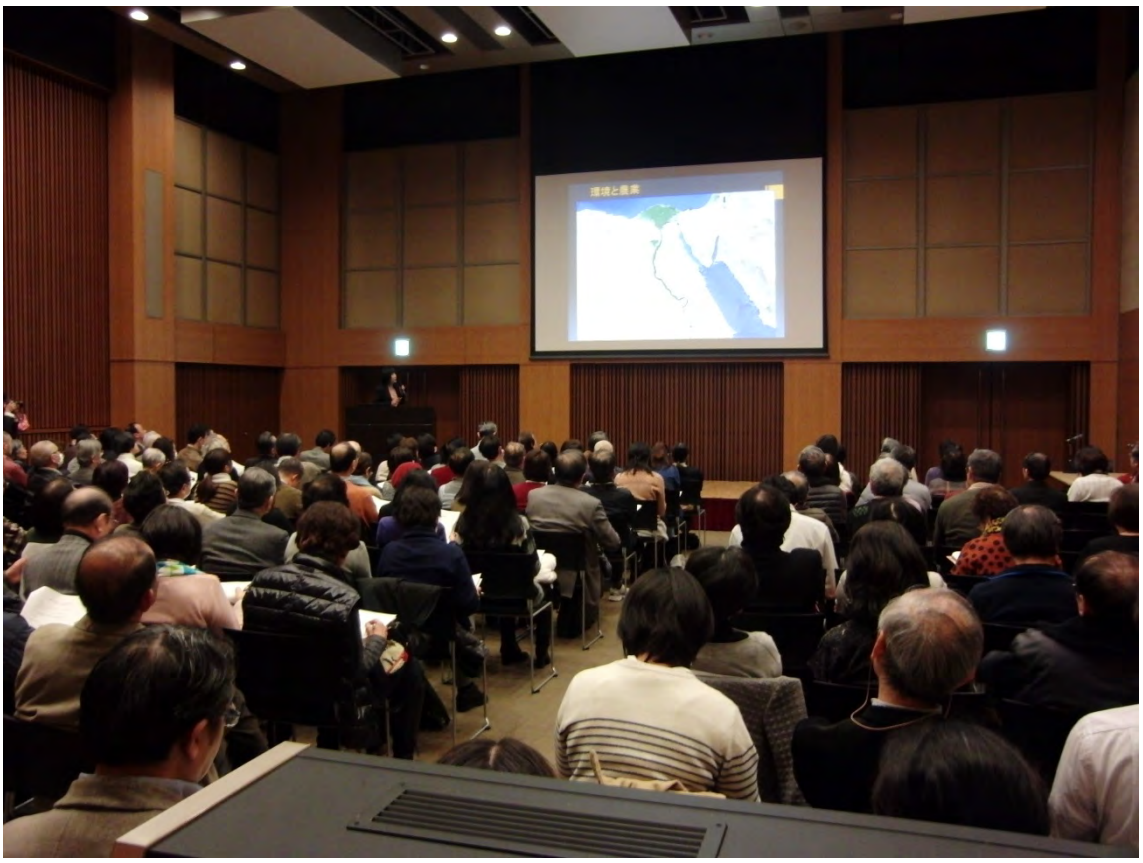
次に河合望氏は、大型のピラミッドの建設が隆盛を極めた古王国時代の経済についてまとめた。とくにピラミッド建設は奴隷労働によるものではなく、農民の徴用であった。そのため建設労働者のための食料の確保が必要となり、これがひいては農業生産高の増大や行政組織の発展、徴税の発達、外国人労働者の徴用などをもたらしたと述べ、アンデスの神殿更新説にも通じる側面を提示した。さらに第 4 王朝スネフェル王下で、ピラミッドおよびそれに付属する葬祭殿の建設や維持のために王領を設けるなどを指摘し、これまたアンデスのインカ帝国の統治システムとの類似性を想起させる内容であった。

アンデス研究者側は、まず報告者が、農耕定住とほぼ同時に出現する神殿の発生メカニズムについて、従来日本調査団が提唱してきた神殿更新説を発展させたモデルを示した。従来の神殿更新説は、神殿の建設や更新こそ労働力の統率、食糧増産、社会の複雑化をもたらしたという画期的な文明論を提示した点で高く評価できるものの、なぜ神殿が更新され続けたのかという点については全く語っていない。ここに社会科学で注目される実践論や社会構造化論を接合させることで、更新活動で生じる破壊と廃棄自体にも儀礼性を求め、

できあがった神殿で執り行う儀礼だけが宗教性を持つのではないことを主張した。

井口欣也氏は、日本調査団が長年発掘を行ってきたクントゥル・ワシ遺跡をとりあげる。そこでは、形成期後期前葉に洗練を極めた大神殿が成立し、祭祀儀礼が発達するとともに使用する儀礼用具の生産が強化され、社会の複雑化は進んだ。また広域にわたる貴重な資源・加工品流通のネットワークも成立した。しかし形成期後期後葉には、神殿の建設・改修活動が活発化するが、土器やその他の工芸品の原材料は神殿周辺で採取可能なものに限定されるようになり、遠隔地の貴重な資源の流通ネットワークについても一部は維持されたものの、内容は限定的かつ重点的になったと指摘する。こうした詳細な社会変化を追究することができる事例は少なく、クントゥル・ワシ遺跡からの考古学情報は貴重である。

パネリストらによる討論では、会場からの質問を交えながら活発に意見が交わされ、予定時間を過ぎても会場から質問や意見が出され、盛況のうちに終了した。



写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト

主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究（S）

「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）

協力：古代アメリカ学会